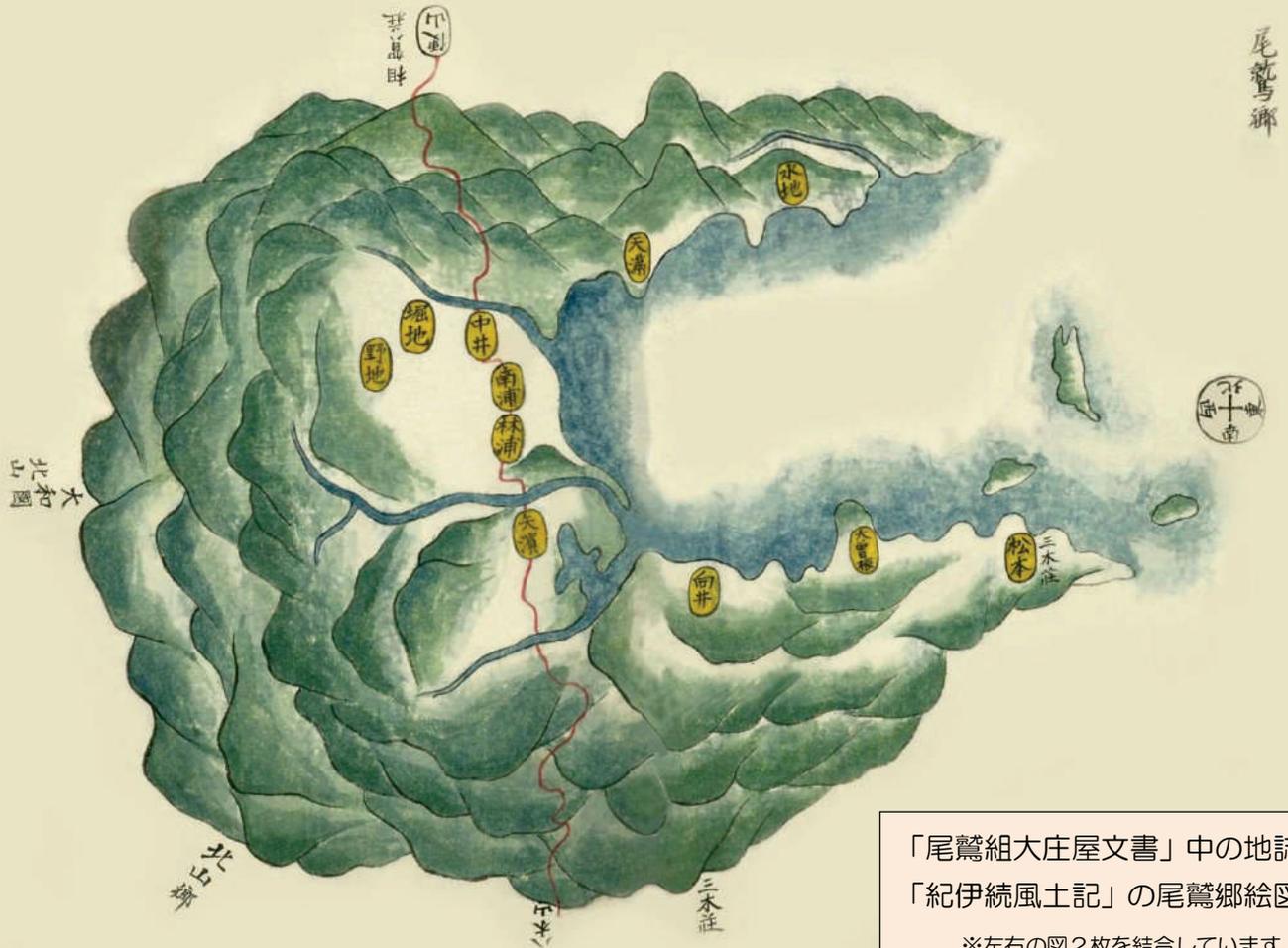


ふるい お わ せ ま ち の む か し が た り

旧尾鷲町之昔語



「尾鷲組大庄屋文書」中の地誌
「紀伊続風土記」の尾鷲郷絵図
※左右の図2枚を結合しています。

私たちのまち尾鷲市は、昭和29年（1954）6月20日、当時の北牟婁郡の尾鷲町・須賀利村・九鬼村と、南牟婁郡の北輪内村・南輪内村とが合併して誕生し、市の呼び方を「おわせ」としました。

それまで「尾鷲」は、話し言葉では「おわせ」と言っていましたが、正式には「おわし」でした。貞和2年（1346）の荘司家古文書のなかに「おハし」の文字が確認でき、その後も「遠和志」（※万葉仮名で書かれたもので、漢字に意味はありません）と書かれています。

そんな尾鷲の尾鷲町、いわゆる「旧町内」に関する、少し昔のお話です。

【水地浦】

くおわせ発祥の地ともいわれるく

水地浦（すいじこうら）は尾鷲湾の北側にあつて、「水地」と「古里」からなる天狗倉山系を背にして南に向いた集落です。天保10年（1839）に編さんされた「紀伊続風土記」には「尾鷲の本村（もとむら）なり」と書かれています。それは、水地浦が山の尾根の端にある村、つまり「おはし」で、「おわし」の語源になったという説があるからです。



この浦は江戸初期に栄えましたが、明治9年には天満浦と合併しました。集落が衰えた理由は二つあります。一つは、若者たちが賃金の良い尾張（愛知県）の回船に乗るようになったこと、もう一つは、田畑をシカやイノシシなどに荒らされたことです。

寛政2年（1790）、ときの尾鷲組大庄屋の玉置元右衛門は、水地浦の田畑を獣たちから守る猪垣（ししがき）を作ろうと計画しました。紀州藩に助成を願い出ましたが財政難で認められず、そこで尾鷲組十四か在のうち、水地浦を除く十三か在に援助をお願いしたところ、すべての浦村がこころよく承諾してくれました。遠方の須賀利浦・九木浦・早田浦・行野浦はお金で協力し、ほかの浦村は人員を出すことで、約1年をかけて立派な猪垣を完成させました。

その後、若者のいない集落は次第に衰えていきましたが、現在も水地ではこの猪垣を見ることが出来ます。

■水地浦の地名の話

「水地」の由来は「豊かな水があるところ」です。江戸時代まで天狗倉山系の南面は原生林におおわれており、良質の水があふれていました。

「古里」については、全国的に室町末期から江戸初期ごろに田畑が造成され、その際、造成地には新地名が付き、元の集落は「ふるさと」と呼ばれました。このため、古里は水地よりも古い集落です。

【天満浦】 堅実な天満と華やかな長浜

天満浦は「天満」と「長浜」の集落から成ります。

天満は、農地となる土地は狭いものの、巻の宮と天満宮をまつる二つの岬で風波を受けず船の係留には絶好の港で、入港する回船の荷の積み下ろしや、船底をいぶして強化するのに最適なウラシロやコシダがよく採れ売れたこと、また、炭こもを作って販売するなどの仕事があり、質素ながら困窮者のいない集落でした。

また文化9年（1812）には漁業も始め、江戸末期には漁港としても有名になりました。

一方、汐鼻と天神岬との間にある細長いまち通りの長浜には、長六屋などの船宿が3軒あり商港としても繁昌しました。尾鷲の前の浜へ荷上げた諸国の回船



は、帰り荷の木材・木炭・鰹節を積む間、長浜港へと船を入れました。江戸期の記録によると、常に5から10隻の帆船が停泊していましたが、長浜では船から入港料もとっていたので浦の財政は豊かで、長浜の人たちは派手好みでした。

また、当時は遊女を抱えた妓楼（ぎろう）があり、天海・光月・港・寿・風帆・千歳・吉本の7軒が、毎夜太鼓や三味の音を響かせにぎわいました。尾鷲や矢浜・向井の若衆も通ったといいますが、お金離れのよい船乗りたちが最上の客でした。彼らは酒宴のなかば酔うほどに全国各地でおぼえた民謡を披露し、それらを尾鷲に定着させることとなりました。

■天満浦の地名の話

「天満」の由来は、天満宮を祀った天神岬があるためですが、天満と長浜の中央に流れる川の名前「スバル」は、古い言葉で山の尾根が重なっている状況を表したもので、つまり平地がとても狭いという意味になります。

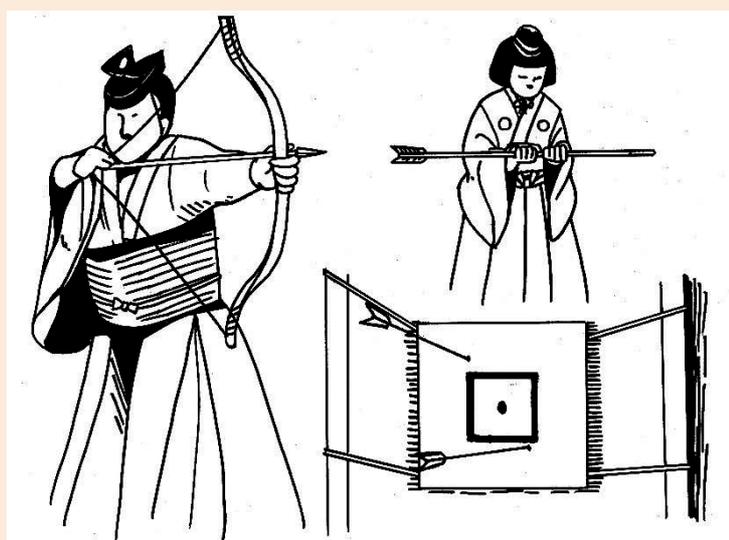
天満築港を作る際、この川の流れが邪魔になったので天神岬を切り開くこととなり、天満宮は島になりました。

【堀北浦】

く北川を挟んで両岸の村が合併く

堀北浦は、紀州藩が組制をしいたころ北川を挟んだ堀村と北村（北浦のこと）が合併したまちで、庄屋は北村と堀村が交互に務めました。堀北浦には尾鷲神社や金剛寺があり、尾鷲の歴史とも関わりの深いまちです。

尾鷲神社は、大宝年間（701〜703）の創基と伝えられ、祭政一致の中世以前は尾鷲郷を治めた地土が執りしきっていました。大庄屋制度の確立後、政治・行政



は分離しましたが、

今も祭礼に古いしきたりを残しています。

一般に「ヤーヤ祭」

と呼ばれる祭礼は、

以前は旧正月の1日から8日まで行われました。親方への七度半の使いはなくありませんでしたが、弓射儀式は鎌倉時代のもので、江戸期には大名行列がとり入れられ、

正月行事といっているので神楽や長刀振りも合流しました。

金剛寺は、もとは宮ノ上の奥、「牛の谷」にありましたが、島勝浦安楽寺の十一面観音菩薩と交換したと伝えられています。また、紀州の三代藩主綱教侯の院号が高林院であったことで発音が同じことを遠慮し、正徳4年（1714）、寺名を護国山金剛寺と改めました。

金剛地は由緒と格式ある寺で、江戸時代には熊野五か寺の一つであり、歴代住職は毎年正月に和歌山城で殿様に御目見えが許されました。

■堀北浦の地名の話

北川は、大雨になると水がどんどん流れたため「どんどの川原」、日照りが続くと水が見えないことから「けち川原」と呼ばれました。古くは川の字を「コ」と発音し、矢ノ川は「ヤノコ」、中川は「ナカゴ」と言いますが、北川の名前は新しいため「キタゴ」とは言いません。ちなみに、北川の上流、紀勢線のトンネル付近が「牛の谷」です。「ウシ」は「深く入りこんだ所」という意味で、宮ノ上の平地が奥深い様子を表しています。

【野地村】

〜祭礼に関する地名を多く残す〜

野地村は、西のはずれに位置した山裾の村です。鎌倉期ごろから開墾され室町期には家が建ち、「野路・野地」と名付けられました。ちなみに、「原」は低地の平地を表し「野」は山近く、やや高い場所の平地を表します。宝永の大津波によって尾鷲では貴重な資料が多く滅失しましたが、野地村の庄屋宅にだけ享保20年（1735）に編さんされた「見聞闕疑集（けんぶんけつきしゅう）」が残りました。

野地村では、村人の9割が炭焼きと関わっていました。江戸時代、暖をとるには木炭が唯一の資材であり、回船で江戸へ送ったのです。

尾鷲周囲の山々は九か村（水地・天満・中井・堀北・野地・南・林・矢浜・向井）の共有財産で、炭焼



きによる収益は決められた割合で分配されました。配当は、水地浦や天満浦を1とすると野地村や矢浜村は10倍ありましたが、これには理由があります。

江戸時代、峠を越えて藩の書状を運ぶ役があり、馬越峠は野地村が、八鬼山は矢浜村が担ったからです。また、尾鷲神社祭礼の最終日の儀式で上座に座る親方や詰座（妻座）などの役人が野地村や矢浜村に多くおり、彼らの先祖は中世に尾鷲を治めた人たちで政治力が大きいことから、配当に座人数割が適用されたからです。こうした配分は、安永2年（1773）に人口割と高割による新しい分配率が定められるまで続きました。

■野地村の地名の話

野地町には「野地殿」・「野地矢倉町」・「参礼殿（されど）」という小字が残っていますが、これらはいずれも尾鷲神社の祭礼に関する地名です。

祭礼の儀式で上座に座る親方や詰座（妻座）衆が多く住んでいたことから「野地殿」、親方への七度半の使いが通った辺りが「参礼殿」、ヤーヤ祭の練りの櫓（やぐら）を組んだところが「野地矢倉町」となりました。

【中井浦】

〜距離の基点となつた高札場〜

平安期から鎌倉期の伊勢神宮の御料地である御厨（みくりや）に「中井須山御厨」がありますが、これは中井浦のことです。須山とは「州山・砂山」のことで、尾鷲湾の波が寄せた砂州のことを表し、また、尾鷲の中央部にあるため「中居・中井」となりました。まちの中心は北川橋南端の六軒町から土井町までで、商家が建ちならぶ熊野街道の主要通りとしてにぎわいました。



六軒町には尾鷲郷に一か所しかない高札場がありました。藩のお触れ（法令）や被災者への救い米の配給などが杉板に書かれて掲げられました。民衆の多くは文字が読めず、庄屋さんは自宅へ皆を集めて読み聞かせました。

また、高札場は尾

鷲からの距離の基点でもあり、例えば、尾鷲と津間の二十七里一町五十五間四尺五寸（約108km）というのは、この高札場から津の岩田橋の元標までとなります。寛政5年（1793）には、中井浦に290軒の家があり、漁業従事者が約半数いましたが、明治初年には一割程になっていました。このことから、中井浦が商業中心のまちに移り変わった様子がうかがえます。

■中井浦の地名の話

中井浦には、知古町（じろこまち）・祢宣町（ねぎまち）・虎世古などの町があります。虎世古は、文禄元年（1592）の朝鮮の役で虎を切り殺し、皮を秀吉に献上した世古慶十郎が住んだことからそう呼ばれました。祢宣町は、寛文6年（1666）、尾鷲神社の初代の神職となった東七郎左衛門が住んだところです。また知古町は、次郎さんの子が住んでいたので「次郎子町」だったそうですが、明治に「知古町」と改められました。

土井町と南町の間に架かる「佐次兵衛橋」は、佐次兵衛さんが費用を寄付した橋ですが、下を流れる川が中井浦と南浦の境界で、今では「堺橋」と呼ばれています。

【南浦】 ～周囲の山地を領する～

南浦は、平安期から鎌倉期にかけての伊勢神宮の御神領を記した神鳳鈔（じんぼうしよ）に「南浜御厨」とあります。正保元年（1644）に南村と林村に分かれ、寛文元年（1661）に南浦・林浦となりました。

南浦には南本町・井戸町・高町・北町・寺町などがあり、中井浦と同じく尾鷲の中心地でした。前の浜も南浦で、回船の荷の積み下ろしや荷さばきを扱う問屋も多く、

また正徳5年（1715）の調べでは、米や麦のとれ高も尾鷲で最高でした。これは村田氏が日尻野（光ヶ丘）を、土井氏が小原野を開墾したからです。

なお、旧尾鷲町の周囲の山は地籍が大宇南浦ですが、これは明治9年に決まりました。尾鷲は山が



多い土地ですが、これらを浦村ごとに区切ることはできませんでした。そのため、水地から向井まで九か村の共同財産となりましたが、行政事務は南浦が兼任することが多く、山々の管理も兼ねることが多かったのです。そこで明治9年8月、当時の尾鷲五か村（尾鷲中井浦・中井野地・堀北・尾鷲南浦・南・林・天満浦「水地・天満」・矢浜、向井）の戸長や議員らが協議し、山地を南浦の属地とすることを決めました。

■南浦の地名の話

「寺町」には当時、念仏寺・祐専寺・安性寺・光円寺がありました。「北町」は南浦では一番北にある町で、「高町」は宝永・安政の津波で被害がなかった高い町、「井戸町」は道の真中に共同井戸がある町です。

開墾地の「日尻野」は稲作に重要な水路の分水点「樋尻（ひじり）」が語源で、小原野から栃川原に向かう際に越える「汐ノ坂」は奈良県に塩を運んだ峠です。また、矢ノ川南谷の上「伝唐（でんがら）越え」ではよく人が行方不明になったことから、転じて尾鷲では行方不明者を探すことを「デンガラコ」と言うようになったのです。

【林浦】 由緒ある地士や素封家の居所

正保元年（1644）に南浦から分かれた林浦には素封家が多く、ことに土井本家は寛永（1624）のころから山々にスギやヒノキを植林し、尾鷲林業の基礎を築きました。同時に千石船を所有して尾鷲材や木炭の輸送を行ったほか、度々の飢饉では率先して米や麦、金銭を抛出し、民衆を救ってくれました。

また、由緒ある地士も多く、その代表として仲新之丞



家があります。仲氏の邸宅は広い範囲を堀で囲み、内側には自給できる畑や剣道場・馬場などをもつなど、中世の土豪の居館の風格を備えています。

当時の尾鷲は、仲・庄司・別当・世古・北村・林の6人の地士たちが共同して治めていましたが、

なかでも仲家は実力者でした。しかし子宝に恵まれず、別当家の新十郎氏を養子にしていました。

戦国時代、新宮に突如として台頭した堀内氏善が勢力を北に伸ばし、尾鷲に攻め入ってきました。各地士は手勢を率いてこれにあたり、仲新十郎と新八親子は中川原で堀内氏の軍勢を撃ち破りました。しかし、攻勢に出た堀内勢に次第に圧されることとなり、関山（瀬木山）砦を防衛線として奮戦したものの、新八は討死、新十郎も自害することとなりました。

その後、堀内氏は荷坂峠までを領地とし、こうして尾鷲の地は紀伊国となっていきました。

■林浦の地名の話

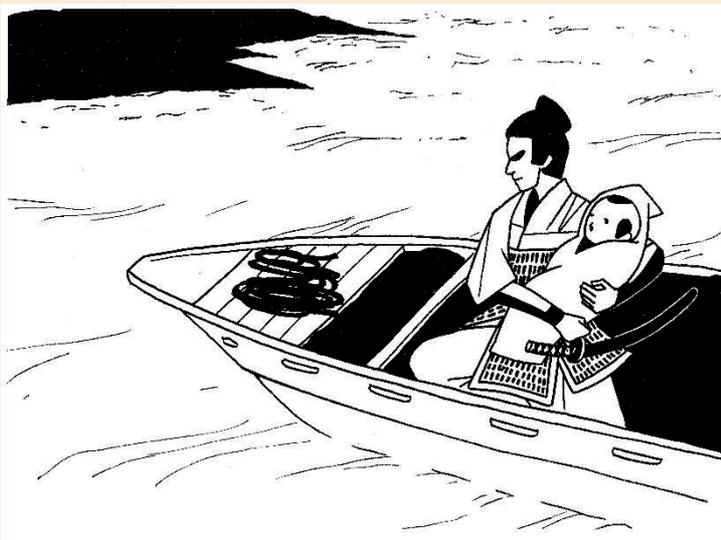
仲新之丞の屋敷周辺は「殿様の住む地」ということで「殿元」と呼ばれました。殿元の南には、かつて小高い瀬木山がありました。この「セギ山」には、「浅間山・千木山・堰山・千軒山・世義山・瀬木山・関山」と多くの字が当てられています。なかでも最も古いものは「浅間山」で、中世山頂には浅間神社が祀られ、集落を疫病や災いから守ったと言われています。

【戦国時代の尾鷲】

堀内氏による地方統一

戦国時代の尾鷲は、尾鷲郷では仲・庄司・別当・世古・北村・林の6氏が、三木荘では東・大倉・中村・浜・世古・大門・三木（三木新八郎）の7氏が、曾根荘では佐々木氏（曾根弾正）が各地を治めました。また志摩地方で勢力をふるった九鬼氏は九木浦の出身でした。

1549年、新宮の堀内氏善が九木浦から八鬼山を越えて尾鷲に侵攻します。尾鷲の仲氏は、一時堀内勢を撃退するも次第に圧さ



退するも次第に圧され、関山砦の戦いで敗北。子の新八が討死し、新十郎は孫の富士太郎を浜島へと逃し自害しました。後に仲一族は尾鷲に戻り再興を果たしますが、この戦い後、尾鷲は一時堀内勢の支配下となります。

1575年、堀内氏は三木荘の三木城

を攻めます。この時、曾根荘の佐々木氏は、以前から三木氏と対立しており堀内勢に組していました。三木城主の三木新八郎は、鳥羽城主となった九鬼嘉隆の助勢を得て堀内氏を退けますが、その後、九鬼氏と不和になり、助勢をなくした後、三木氏は堀内氏に敗れました。

翌年の1576年、手薄となった三木城を紀伊長島の加藤・奥村氏が攻め落とし、時を同じく尾鷲も堀内氏の支配から離脱しました。しかし堀内氏は即座に攻め返して三木城を奪還。その後、加藤氏を攻め滅ぼし荷坂峠までを制圧します。尾鷲は最後まで抵抗し、庄司・北村・世古氏らが中村山を本陣に抗戦したものの、1582年、堀内氏によって当地方の統一がなされました。

尾鷲の地土らの一族は、その後も領地で一定の優位が認められ、近世でも宮座の座人として残りました。尾鷲神社祭祀における三つの禊は、中村山を本陣に左翼の関山砦（瀬木山）、右翼の山の神砦（古戸野）で堀内勢を迎え撃つたことをなぞらえ、かつては一番禊を庄司・世古・北村氏が、二番禊を仲氏が、三番禊を別当・林氏が務めました。また、戦での「やあやあ我こそは」の名乗りがヤーヤ祭の名の由来と言われます。

【矢浜村】 最高の良田を所持した農村

矢浜村は、伊勢神宮の御料地を記した神鳳鈔に「焼野御厨」と書かれています。尾鷲のまちの南に位置する農村で、南浦に次ぐ収穫がありました。

矢浜村の歴史は荒れ畑や原野を良田に改良することの連続でした。野田の田が開墾され、水を引くために矢の川から野田用水路が引かれました。その後も新田造成が続き、野田用水路は桂山沿いにも延長されました。



村では収穫を良くするため田や用水路が大切にされました。明治の地租改正のとき田畑には一等から十二等まで等級が付けられました。矢浜村は尾鷲で最高となる三等でした。

矢浜村の人たちが一番困ったことは、書状送りです。公用の書状を名柄村まで

送る役目があり、八鬼山を越えて若者を遣わせましたが、一番恐れたのが病気になった狼です。

安永9年（1780）6月28日、1匹の病狼が日尻野に出て農民4人と牛4匹にかみつきました。翌日は八鬼山中茶屋と九木峠の間で長州（山口県）出身の巡礼者の額にかみつきました。この狼退治に矢浜村の人たちが狩り出されましたが、7月1日、矢の川の主が谷でこの狼は鉄砲で打ちとられました。また、天明5年（1785）には、病狼の群れが矢浜村を襲い、多くの人が死んだと記録されるなど、病狼には大いに手をやきました。

■矢浜村の地名の話

中川から矢浜に向かう熊野街道の海側には「汐受」・「下野田」・「汐附」があり、山側には「上地」・「名古（なご）」・「岡崎野田」と続きます。6千年ほど前、縄文海進と呼ばれる海面上昇によって、海岸線は今より数メートル高いところになりましたが、汐受は「海水を受ける所」、名古は「なごやか」で、波が静かに寄せさまを表しています。矢浜では、ちょうど上地・名古・汐受あたりで、縄文時代の土器片などが見つかっています。

【向井村】 〜尾鷲で最初の庄屋がいた村〜

神鳳鈔にある「村島」は向井村のことです。向井は「村之内」と「村島」に分かれています。平安期から鎌倉期には、双方あわせて村島と呼んでいました。

向井村には村島家という旧家があります。慶長6年（1601）の検地のとき庄屋を勤めていましたが、そのころの尾鷲は6人の地主が治めていて庄屋が決まっておらず、村島氏が尾鷲でただ一人の庄屋でした。



向井村は田畑が半々の広い農地をもっていました。とれ高は多くなかったため、農業と林業や薪作りなどで生活を支えていました。

紀州藩が文政4年（1821）に浦村の名産調査をした際、向井村では「黒砂」が報告されています。中央を流れる黒の川

の黒砂が堆積したところが黒の浜ですが、昔の家や土蔵には黒塗りの壁が多く、材料となる黒砂は良い値で売れたため、回船で大阪や江戸へと送られました。明治5年に戸籍を作ったとき、この黒砂を取り扱った人たちは「黒」という姓をつけました。

文久元年（1861）3月20日、八鬼山で追いはぎ事件がありました。盗賊に襲われた浜助が荒神堂へ駆け込み助けを求めたところ、万宝院という修験者が盗賊を取り押さえました。この人は向井村の出身で、今も荒神堂のそばにはお墓があり、香花が供えられています。

■向井村の地名の話

向井の地名は、紀伊続風土記では「尾鷲の元村である水地浦の対岸にあるためついた」としています。室町時代には「向」の1字だけでした。また、村島の「村」は人家が群れているという意味で、「島」は独立した村という意味のため、尾鷲から離れた集落を表しています。向井からは7千年前の縄文時代早期の土器片が出土していますが、この土器からいえば、集落としては水地浦より向井の方が古いと考えられます。

【大曾根浦】

〜尾鷲湾の漁業権を持つ漁村〜

大曾根浦の浜には、尾鷲神社の御神宝となった獅子頭

が流れ着いたという伝えがあり、中世の尾鷲を治めた地士の庄司・世古氏らの縁者が多く住むなど、尾鷲神社と密接な関係をもってきました。戦前まで祭礼の一番袴は大曾根浦が受け持ち、その経費の補助として尾鷲七郷の名吉（ボラ）網5帖中の1帖が任せられました。後にそれが漁業権にまで発展し、各浦の地先きを除く尾鷲湾の漁

業権は大曾根浦のものとなりました。

江戸時代の大曾根



浦には、常に網11帖・船14隻があつて、浦人の生活は漁業中心でした。尾鷲五か在経営の網が、文化・文政のころ次第に浜方商人に売り払われましたが、大曾根浦は湾内漁業権を保持していたため、戦

前まで地下網経営を保ってきました。

大曾根浦には天明7年（1787）から大正9年（1920）にかけて304冊の漁魚代割帖や網関係の文書が残っています。そのうち最も多いのはボラ漁のもので、ほかにはムロアシ・コガツオ・カツオ・エビ・マグロなどがあります。この文書によると、売上の分配方法は江戸期の文久から大正期まで変わっておらず、昔ながらのしきたりが守り続けられていたことが分ります。

■大曾根浦の地名の話

大曾根浦の「曾根」という地名は全国的に見られ、山の峰をさす場合や、石の多いやせ地をいう場合、海中に岩が多い豊かな漁場を表す場合など解釈はさまざまですが、大曾根浦の場合は豊かな漁場が合っています。

浦の西北には獅子頭が流れ着いたと伝わる浜があり、尾鷲の人は「カラカ松の浜」と呼びますが、大曾根浦の人たちは「カケイソ」と呼びます。尾鷲神社の祭礼のとき、大曾根浦の人たちはこの神聖な浜の夫婦岩に大注連縄を掛ける神事を行うことから、「掛け磯」と呼ぶようになりました。

【行野浦】 〽二百六十年をかけた集落移転〽

行野浦は、もとは紀勢線九鬼トンネルの北口付近、現在は「元行野」と呼ばれる土地にありました。魚が多い毛尻湾に臨むものの荒波をまともに受ける荒磯であったため、波静かな「松本」へ引っ越そうということになり、万治2年（1659）から移住を始めました。

元行野から松本へは断崖沿いに小道があり、人々はこの道を通いながら松本を開墾し、移住を進めました。享



保9年（1724）までに20戸が移住しましたが、文化7年（1810）には5戸が元行野に残っていました。またこの時点で、松本が正式に行野浦となりました。その後、全戸が移住したのは大正の中ごろで、最初の移住から実に260年が経っています。

松本では、船の着岸は楽になりましたが、困ったのは漁業権です。当時は大曾根浦が漁業権を持っていたため魚ができず、事情を尾鷲組大庄屋に訴えたところ、行野浦が移住してきた新参の浦であることが考慮され、松本地先の漁業権を譲ってもらえることになりました。

その後行野浦は、明治22年3月1日に九鬼浦・早田浦と合併して「九鬼村」を作りましたが、明治42年、九鬼村から離れて尾鷲町に合併しました。

■行野浦の地名の話

現在の行野浦は、もとは行野浦の字「松本」です。松本の由来は「大きな松の木があり、その本にある集落だから」といわれますが、元行野から松本へ移住してから名付けたのか、それとも移住前からその地名があったのかは分かりません。松本の東には、桃頭島に向かって「瀬元鼻」という小半島がありますが、両者の間は川の瀬と同じように底が浅く流れが速いところでした。

また、行野浦には「毛尻」という地名があり、この毛は「よく茂っている林」という意味ですが、暖かい海岸地帯の特性をよく表しています。

【浦と村】

〜尾鷲郷が尾鷲市となるまで〜

旧町内の昔の浦村は、野地村・矢浜村・向井村以外はすべて浦となっています。一般に「浦」と「村」との違いは、「漁業権が有るのが浦で無いのが村」と考えますが、矢浜や向井は村であっても漁業権があることから、この考えは当てはまりません。

この浦と村の違いは、藩の御用で船を出し、海上輸送に労働力を提供した「浦役」とも呼ばれる加子役がいた村が「浦」となり、陸上輸送に労働力を提供したのが夫役（里役）のいた村が「村」となりました。尾鷲市の浦村の移り変わりは、次の表のとおりです。

須賀利村	須賀利浦	須賀利浦	引本村	須賀利村	尾鷲市
水地村	水地浦	天満浦	尾鷲町	尾鷲町	
天満村	天満浦	堀北浦	尾鷲町	尾鷲町	
中井・堀・北	野地村	野地村	尾鷲町	尾鷲町	
野路村	中井浦	尾鷲中井浦	尾鷲町	尾鷲町	
南村	南浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
矢野浜村	林浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
向村	矢浜村	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
大曾禰村	向井村	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
行野村	大曾根浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
九鬼村	行埜浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
早田村	九木浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
下松村	早田浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
三木浦村	盛松浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
三木浦村	三木浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
小脇村	小脇浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
名柄村	名柄村	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
三木村	三木里浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
古江村	古江浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
賀田村	賀田村	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
曾禰村	曾根浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	
梶加村	梶賀浦	尾鷲南浦	尾鷲町	尾鷲町	

▼慶長検地帳（1601）

▼天保郷帳（1834）

▼地方行政区画便覧（1886）

▼市町村制施行（1889）

▼町村合併促進法公布（1953）

▼現在（1954）

【地名考】

身近な「小地名」の魅力

地名とは、ある地点や土地などに、何らかの意図や理由を込めて付けられた呼び名が、その後人々に受け入れられて定着したもので、大まかに分類すると、山や川など地形や自然にちなんだ「自然地名」と、人々の暮らしや信仰、政治などから生じた「文化地名」に分かれます。よって地名について学ぶことは、その土地の文化や歴史、自然を学ぶことに通じます。

また、地名は言葉ですから、音があり意味があります。その伝達は音声や文字で行われますが、長い時間のなかで、話し言葉は聞き手・話し手によって、文字は読み手・書き手によって変化します。さらに、土地の所有者や統治者、社会情勢などの影響で改変されることがあります。奈良・平安期には、天皇の詔（みこと）のりや律令などで「二文字」と「好字化」が図られ、その後この傾向は社会に浸透していきました。例えば国名にも「木国」が「紀伊国」との変化が見られますし、尾鷲でも「お八し」の万葉仮名は「遠和志」ですが「尾鷲」となり、「下松（さがりまつ）」が「盛松」と変化しています。このような変化は、大きな地名に多く起こりましたが、小字や土地の人々の間だけで通じる地図にも載らない

地点名などの小さな地名では、影響が少ない傾向にあります。こうした「小地名」を学ぶなかで、今では失われた地域の文化や歴史の断片に触れることができたとき、考古学にも似た魅力を感じることが出来ます。

身近な小地名について学ぶことは、単なる知識としての学習にとどまらず、地域や自然との結びつきを体験として強く感じることに繋がります。これを機会に、皆さんも「ふるさと尾鷲」について学んでみませんか。

【参考文献】 ※いずれも尾鷲市立図書館にあります。

- 「尾鷲市史 上巻」 尾鷲市 1969年
- 「尾鷲市史 下巻」 尾鷲市 1971年
- 「尾鷲市史年表 市制40周年」 尾鷲市 1994年
- 「見聞疑集」 尾鷲市立中央公民館郷土室 1984年
- 「郷土むかしばなし」 尾鷲市郷土館友の会 1976年
- 「おわせの浦村」 尾鷲市郷土館友の会 1977年
- 「ふるさとの石造物」 尾鷲市郷土館友の会 1980年
- 「三重懸紀伊國 北牟婁郡地誌」 野地義智 1889年 名著出版
- 「日本歴史地名大系24 三重県の地名」 平凡社 1983年
- 「柳田國男全集20」 柳田國男 1990年 ちくま文庫
- 「地名の由来を知る辞典」 武光誠 1997年 東京堂出版

【旧尾鷲町之昔語】

尾鷲市教育委員会生涯学習課 発行年月：平成29年3月（尾鷲学構築モデル事業）
〒519-3616 三重県尾鷲市中村町10番41号
電話：0597-23-8293 FAX：0597-22-0080

【「三重懸紀伊國 北牟婁郡地誌」記載地名】

長濱・天満・生草・古里・水地・土井町・知古町・川原町・新川原町・中井町・北川橋西川側・上川原町・禰宜町・下り坂町・牛ノ後・虎世古・今町・栢町・堀町・氏神川向・野地新町・野地殿・野地殿上・野地立町・野地矢倉町・参礼殿・中村山・古戸・古戸野・古戸山・古戸平畑ノ上・泉左リ川側通・垣ノ内・泉ノ内・泉・古戸野蜜柑山・山邊・上ノ山・倉ノ谷川側・倉ノ谷・倉谷・倉ノ谷田ノ上・倉ノ谷左リ・池ノ平・倉ノ谷山・池ノ端・倉ノ谷通下・倉ノ谷堀割・倉ノ谷道通山・倉ノ谷堀割道通り山・倉ノ谷堀割道下・坂場大道ノ上・坂場山ノ神森・坂場墓ノ上・坂場庚申森・梅ノ木谷・梅ノ木谷入口・坂場・何枚田・茶地岡・座ノ下・どんど川原・宮ノ上・宮ノ後・丑ノ谷・西山田ノ上・寺尾地続・北浦・北浦平・大島元・妙見堂・脇ノ濱・菊山・小久兵衛谷・東山田・西山田・馬越・馬越大道右・馬越大道左・濱・北町・明慶町・世古町・袋町・高町・松下・中町・井戸町・新町・殿元・せぎの山・山の鼻・林町・南町・寺町・中久留・中村山・中村山の腰・元山神の上・野輪・折橋・上中川・下中川・自然地・小川・小川山神の森・小川田の

上・小川庚申の森・自然地上野・中川黒淵瀧・大瀧・大瀧道下・大瀧道上・日尻野山田・日尻野・日尻野良運・日尻野川端・小原野小谷・小原野船崎・小原野・小原野奥楠堂・小原野奥滑山・新田割谷・新田奥野地竈・新田奥水呑・新田奥大壹櫃・新田側河・新田奥鈴の谷・新田の上薬師谷・向山・矢濱上野山・矢の川野田山・矢の川主ヶ谷・矢の川大曾越・矢の川橋ヶ谷・矢の川長尾・がらぎ・眞砂福松・眞砂ごと崩・眞砂牛草崩・眞砂口滑・眞砂秤返・八木山七曲・八木山櫻茶屋・八木山古田・八木山棚山・八木山小佐山・向井玄工・向井小谷・向井上中道・向井笛草・向井中道・向井空谷・向井本谷・八木山赤崩・八木山の瀧・八木山相の谷・八木山三本木・八木山水呑・八木山蓮花石・八木山荒神堂・八木山唐杉・八木山君ヶ谷・眞砂くぐり木・眞砂奥滑・眞砂深谷・矢の川小瀧・矢の川三田谷・矢の川あみだせ・矢の川赤間畑・矢の川古和谷・矢の川横山・矢の川天満木屋・矢の川口すぼ・矢の川千本木・矢の川葛籠谷・矢の川唐瀧・猪食木屋・矢の川金木屋・矢の川小濱・矢の川うと木屋・矢の川二ツ木屋・矢の川新道・矢の川日尾・矢の川小坪・矢の川蔭谷・矢の川傳唐越・矢の川南谷、ほか